

学習院アーカイブズ ニューズレター

14

Gakushuin Archives Newsletter 2019.7.15 vol.



学習院大学卒業記念アルバム（昭和37（1962）年3月版）から

学習院における新制大学の設立は昭和24（1949）年4月、今年が70周年となる。

左は、安倍能成院長の筆による院歌（校歌）1番の歌詞。

右は、石川滋彦先生（画家・元高等科美術講師、当時美術部指導）が描いた目白キャンパスのスケッチ。卒業記念のアルバムに彩りを添えている。（絵中一部見えるのは、右から西1号館、南1号館と当時のピラミッド校舎）

Contents

現在から未来へのとびら二題

学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻 教授 保坂 裕興 2

記憶にとどめたい「泰西名画展」

学習院名誉教授 大学美術部OB 寺田 勝彦 4

初等科所蔵資料の調査と整理について

学習院アーカイブズ 桑尾光太郎 6

主な活動（2019年2月～2019年6月）

..... 8

現在から未来へのとびら二題



学習院大学大学院人文科学研究科
アーカイブズ学専攻 教授 保坂 裕興

近年の不適切な文書管理事例を機に、文書管理専門職のアーキビストを育成し、配置すべきだという声が聞かれるようになった。その専門職を産み出す「アーカイブズ学」とはどんなものか教示されたいというのが私への依頼である。学習院アーカイブズに残された戦前・戦後の資料を見わたすと、既にその学問的営みの基礎を各所に見いだすことができる。それらのうち二題を紹介することを通して、課題に応えたい。

時は、昭和31（1956）年9月、学習院長安倍能成は、理事及び各学校教職員等30名に学習院史編纂委員会委員を、児玉幸多教授に同会委員長を委嘱した。その第1回委員会の議事要旨によれば、院長は「私立学校となって明（る）三十二年が十年になる。同時に、開校以来八十年に相当するので、院史を編纂したい。」と述べ、新たな院史編纂を宣言した。学習院アーカイブズが所蔵する簿冊「学習院史編纂関係書」には、この文書をはじめとして、以後の委員会業務から、同38年の『学習院の歩み』（結果として学習院創立85周年記念刊行物となった）刊行、そして昭和40年代の情報収集等補完作業に至るまでの文書（実物）の一切が綴じられている。このように業務の全容が知られる簿冊は、いったいなぜ作成され、保存されたのだろうか。

なかを紐解こう。まず冒頭部分で編纂方針に関する文書がみられる。全体を「戦前凡（そ）十年、戦時・終戦、学制改革・私立学校の三段階」に分けるとともに、従来は「制度史的」であったので趣を変え、実際には学校の重要事項を年代順に記し、「重要問題については記録、口述、座談会その他」によって詳述することとした。そのため資料収集について「編纂原稿以外、広く資料・写真等を集め、保存する」という方針も最初に確認された。数量で見ると、全文書36件のうち、委員会開催・予算等4件、編纂要項・原稿執筆依頼等4件、資料調査及び借用・返却関係16件、座談会関係4件、事後の事務4件、事後の情報収集4件である。すなわち、委員会業務を迅速・適確に行ったことが窺えるのはもちろんだが、編纂方針にあった通り、座談会の開催を含め資料の収集・保存に特段の注力をしたことが分かる。

この成果物たる『学習院の歩み』は小冊子体のものであるが、どれほど資料を重視し、過去の事実に向き合ったものであるか、ぜひご覧いただきたいと思う。この資料重視の方針は、次の学校史『学習院百年史』（全三編、1980-87年）においても継続された。

しかしこの簿冊における最大の発見は、「宮内省学習院」時代の公文書簿冊267点を、昭和38年2月、宮内庁書陵部長より学習院長が引き継いだ目録付きの文書である。これらは明治10年代から昭和10年代に及ぶもので、「式事録」・「土地建物録」・「例規録」・「教務録」ほか10以上の簿冊シリーズからなり、現在の学習院アーカイブズ収蔵資料（以下、収蔵資料とする）の中核となるものである。実は数年前にこの文書を発見するまでは、戦後のいつの頃か、宮内庁から引き継がれたらしいということ以外は、伝来や素性が不明であった。前後の文書によれば、新学習院となり院史を編さんするにも基礎資料が欠落しており、編さん開始直後から宮内庁所蔵の同文書等を借り出して使っていたが、昭和37年11月になって、



「学習院史編纂関係書」(左)は昭和31年からの業務文書を編冊したアーカイブズ。「学習院の歩み」(右)はその成果の刊行物である。

それらが廃棄予定となったことを聞き及び、引き継ぎを文書にて願い出て、返還されたのであった。

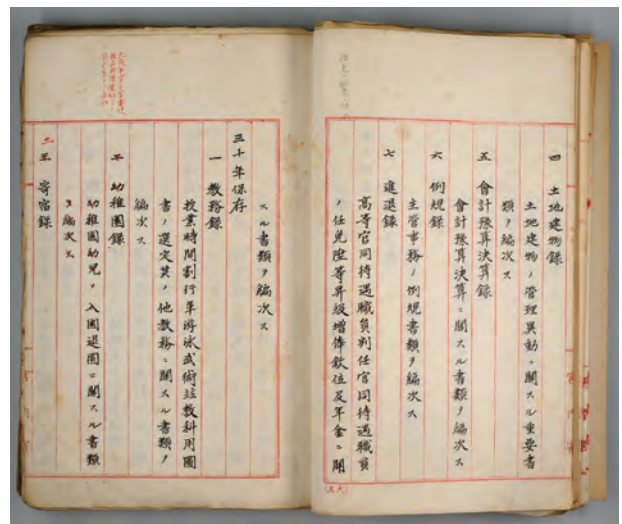
児玉教授が音頭をとった委員会は、この簿冊にその諸活動の文書を取めて業務を迅速・確実に遂行するとともに、未来に向けて、この重要資料に関連する文書、そして座談会速記録等を含め、収集した資料・情報に関する文書一切を残した。このような簿冊を読み解くことによって、私たちは収蔵資料の構成や来歴を復元できるのである。

現在の私たちは、これらのアーカイブズ（資料）から、当時の学校施設、教育課程、教員・生徒の様子等を詳しく知り、また、今なぜ自分たちの学校がこのような姿形となっているのかを思い描くことができる。そして、次はどうあるべきか、と問うこととなる。

時をもう一つ、溯らなければならない。なぜ、どのように、宮内庁がそれらの公文書簿冊を大量に保存していたのかを知る必要がある。収蔵資料「公文引継関係書類」は戦前期に学習院が作成した簿冊で、宮内省図書寮と学習院との間における文書の引き継ぎ及び借用関係の文書（実物）一切を綴じたものである。学習院は昭和22年3月まで宮内省の出先機関だったが、この簿冊によれば、明治44（1911）年の宮内省の規程により、学習院が作成・使用した文書は翌年に仮編冊し、宮内省図書寮に引き継いで保管した。作成する簿冊名は協議の上あらかじめ決定されており、同時にその種別により永久保存、30年、10年の三区分の「保存期限」が定められていた。教職員たちは、例えば3年前に作成した「教務録」は既に図書寮に納めているので、参照の必要が生じた際には、借り出して使用していたのであった。

ある意味では不便な制度だが、先の公文書簿冊267点は、この制度の中で厳格に保存され、残されてきた。それが昭和38年、リニューアルされた宮内庁のルールに基づき返還されたのであった。それにしても、10年保存というのは実務のためとして理解できるが、30年保存や永久保存という措置はどうか考えればよいのか。重要資料の蓄積、学校史研究を含め、未来における様々な立場からの使用を想定していたと考えるほかあるまいと思われる。

昭和31年にはじまる安倍院長・児玉教授らによる院史編纂の簿冊と資料収集の様子、そして戦前期まで続いた宮内省学習院の公文書管理の簿冊と保存制度の二題を見た。それらは、現在の水準からしても



「公文引継関係書類」に綴じられた文書では、保存すべき簿冊の名称と保存期限が定められていた。他に、宮内省への簿冊の納入、学習院による借用等の記録が収められている。

徹底的な文書主義を採ろうとしたものに見えるのだが、第1に業務の確かな遂行と確認を保障し、第2に重要な文書の資料群＝アーカイブズを構築し、未来における活用を企図するものだったと評価できる。両者は時代も背景も異なるが、現在から未来を見据え、そのとびらを開く役割をも担っていた。

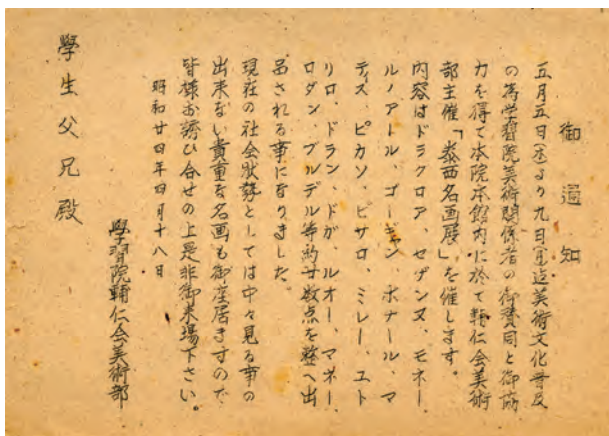
アーカイブズ学は、このような文書取り扱いのエートスを発展的に継承する。そして、新たな課題を含む諸問題を科学的に検証された方法で解決に導く知と技法により構成される。その課題を端的に述べれば、近代以降断続的に起こってきた文書量の爆発的增加、それに対応し処理するための評価選別方法の開発、そしてまた今、日本政府が明確に舵を切った文書の電子的管理方法の実験開発と実施が一つである。もう一つは、文書に含まれるプライバシー、機密、著作権等を適切に保護しながら、団体・組織の構成員・利害関係者等に最大限のアクセスを保障する方策の開発・実施である。

アーカイブズ学専攻は、これらの研究教育に取り組み、新しい解決方策を切り拓こうとしている。今後とも各方面からのご支援、ご協力を願い、擱筆する。

記憶にとどめたい「泰西名画展」



学習院名誉教授 大学美術部OB 寺田 勝彦
(昭和38年大学院哲学専攻修了)



も十分泰西の名画が揃っているといえるが、開催時の「泰西名画展出品目録」には、さらにコロ、クールベ、ゴヤ、ドガ、シャガール等多くの画家の作品が加えられ、出品数は約50点となっている。



泰西名画展
会場風景

ドラクロワ
ゴーギャン
マチス
ほか

平成から令和へ。新天皇即位を祝う雰囲気社会に満ちるなか、「昭和」はいよいよ遠い存在となりつつある。今から70年前の昭和24（1949）年5月、未だ戦後の混迷から脱し切れずにいた時期、目白の杜の一隅で、記憶にとどめたい展覧会が催されていた。学習院^{*}輔仁会美術部主催の「^{*}泰西名画展」のことである。

昭和22（1947）年4月、学習院は戦前の華族の子弟を教育するという特殊な目的を廃し、普通の私立学校として苦難の第一歩を踏み出したばかりであった。さらに学習院大学が新設開校されたのは、それから2年後の昭和24年4月、これを記念した「泰西名画展」が授業開始前の5月5日から9日にかけて催された。

展覧会「御通知」と名品の借用

旧制中等科時代から美術部員であり、当時大学新1年生でありながら展覧会準備の実働部隊をまとめた石川隆三郎氏（旧姓 高橋、昭和28年大哲学卒）から、今まで大切に保管されてきた展覧会に関する貴重な資料を提供していただいた。



石川氏

最初に紹介した写真は、学生父母あてに作られたガリ版刷りの展覧会「御通知」である。あまりにも有名な画家達が名前を連ね、ここにある内容だけで



ルノワール
モネ
セザンヌ
ほか

この出品目録を見て思ったことは、大学生になったばかりの若い美術部員の力によって、果たしてこれだけの名画を集めることが出来るだろうか、ということである。専門の学芸員であっても決して容易なことではないだろう。石川氏から提供された資料の中に、学習院輔仁会会長安倍能成と展覧会責任者富永惣一の名前の、借用書と思われる実に簡単なガリ版刷りの用紙が含まれていた。実際に使われたかどうかは、その控えなどが存在しないので定かではないが、安倍能成学習院長と、学習院大学文政学部哲学科で美学・美術史が専門の富永惣一教授の名前があったとしても、これだけの名画を借用するには何とも頼りない用紙である。

当時、美術部員で展覧会の準備にもあつた島野卓爾氏（のちに学習院大学経済学部教授、昭和28年大政治卒）の「学習院－私の頃」（『学習院新聞』第136号、昭和40年4月

12日)と題する文章の中に、当時について、「昔も今も部費が足りないのは同じである。そこで一計。東京および近郊で泰西の名画をお持ちの方々から富永先生のお名前で拝借し、展覧会の入場料を部費にあてようという訳である。ドラクロア、ボナール、マチス、ゴーガン、モネー、セザンヌ、ロダンなど数多くの作品を富永先生の御紹介で集めはじめた。何しろ皆「本物」ばかりである。盗まれたら部費稼ぎどころではない。一生働いても弁償できない名品ばかりである。」とある。

この文章から、名品の借用に当っては、富永惣一先生(のちに初代国立西洋美術館長)の力がいかに大きかったかがわかる。富永先生は他にも作品の解説をされるなど献身的に協力され、展覧会を成功に導かれた。そしてまた、かくも多くの方々が名画の陳列を容易に快諾された蔭には、別の理由もあったと思われる。元々学習院は白樺派の運動を通じ、文学と美術の啓蒙運動の揺籃の中心的役割を果たして来たという歴史的伝統を持っており、そのため学習院関係者や先輩には、美術愛好家が極めて多くいたということである。

展覧会の成功

「泰西名画展」は、宣伝も十分とはいえ、会期も僅か5日間という短期間にもかかわらず、連日多くの観客で賑わい(5日間で入場者延べ約3,700名との記録あり)、無事に終了した。美術部の大先輩であり、美術評論家として活躍された徳大寺公英氏(昭和16年旧制高等科卒)は、次のように述べている。

「この展覧会には油絵素描等約五十点の主として近代絵画史上重要な画家の作品を網羅することが出来、中には今回はじめて一般公衆の前に出陳された珍品も含まれていた。これ程多くの泰西の名品が一堂に会したことは日本の美術界では稀有なことである。その意味において、戦後学習院、及びその関係団体が行った一切の事業のうち最も文化的意義なものであつたと称して過言ではない。」(『学習院新聞』第1号、昭和24年6月27日)

この蔭には、他校や画廊、百貨店、喫茶店などにポスターやチラシを配るために走り回り、また校舎を使用した会場造りに汗した美術部員達、また会場の片隅に置かれた簡易のベッドで何泊も泊り込んで作品を守っていた美術部員の

涙ぐましい働きがあり、男子部・女子部の高校生部員を含む、その溢れるような若い力なくしては、この展覧会の実現はなかった。そして、それら全てを包み込む学習院という学校だからこそ、の展覧会であった。



「泰西名画展」の再現

平成になって、この珠玉のような「泰西名画展」を再現しようという活動があった。展覧会を再現して富永先生を偲びたいという、石川氏の他、当時中心となって動いた上田薫氏(画家、昭和23年旧制高等科卒)、大村義治氏(昭和32年大学院哲学修了)ら卒業生の強い思いから始まった活動である。展覧会再現のためには、まず出品作品を特定することが必要であるが、「泰西名画展」の出品目録には、所蔵者や制作年代、それに作品のタイトル、大きさなど必要な記録がなく、作品の特定は大変困難な作業であった。当時の関係者の記憶に頼ることもなかなか今となっては難しく、それでも大村氏らの記憶から、現在美術館蔵や個人蔵となっている数点は明らかになった。

その他にまた、会場を撮った写真や見取り図から、展覧会場の模型も製作している。が、しかし、現在はひとまず活動は中断。このような素晴らしい展覧会が開かれたということを改めて今回ここに紹介して、あとは若い後輩達の活動に期待することにした。



関係者集合写真(5月9日会場にて撮影) 中央：富永惣一先生
前列 左から3人目：児島喜久雄先生 右から1人目：上田薫氏 2人目：徳大寺公英氏
後列 左から1人目：石川隆三郎氏 3人目：島野卓爾氏 右から3人目：大村義治氏

* 「学習院輔仁会」は、明治22年に発足した、学習院全学生の課外活動の中心機関である。

* 「泰西」とは、西洋又は西洋諸国のこと。

* 会場は当時の本館(現西1号館)111室の経理室を使用した。この部屋は、現西2号館建設のため部分的に取り壊された。

初等科所蔵資料の調査と整理について

学習院アーカイブズ 桑尾 光太郎

学習院初等科は1899（明治32）年、現在の四谷キャンパスに校舎を構え、1940（昭和15）年には現本館が建設された。目白キャンパスや青山の女子学習院に比べると戦災による被害が少なかったことから、明治期以来の教育教材や文書資料などが数多く残されている。学習院アーカイブズは2011（平成23）年の設立当初から、初等科の協力を得て所蔵資料の調査・整理にあたってきた。作業は当分続く見込みであるが、本稿ではこれまでの経過概要を振り返ってみたい。

西館集会室倉庫・資料展示室の調査

調査作業は2012（平成24）年、初等科西館の集会室倉庫と資料展示室に収蔵されていた諸資料から始められた。皇族が初等科在学中に使用された一体型の机腰掛をはじめ、明治期に使用されたランドセル・教育教材である掛図・実物標本類・模型ほか様々なモノ資料が収蔵されており、文書資料や印刷刊行物・古写真も残されていた。これらの資料については概要を撮影するとともに仮目録を作成し、作業データ（目録・画像等）を初等科とアーカイブズで共有している。



1. 渾天儀

その成果は同年10月～12月、学習院大学史料館・学習院大学文学部教育学科

開設準備室の共催で行われた特別展「近代日本の学びの風景—学校文化の源流—」に活かされ、初等科所蔵のランドセル・日本国内や世界の物産標本・歴史的人物や生物などが描かれた掛図などが、目白キャンパスの史料館展示室に出品された。そのなか

でも1874（明治7）年に製作された球形の天体観測装置である「渾天儀」（画像1）は、2017（平成29）年の大学史料館秋季特別展「黎明期の学習院—神田・虎ノ門のころ—」や、2018年の文京ふるさと歴史館特別展「ねこの細道・さんぽ道—ぶんきょう道中ひげ栗毛—」でも展示されている。昭和天皇や上皇陛下が初等科在学中に使用された机腰掛は、たびたびテレビ番組でも紹介された。

続いて初等科正堂に掲げられている勅額の調査および修理を、2015年から翌年にかけて実施した。その概要は本紙10号「初等科勅額の修理について」に掲載したとおりであるが、このときには勅額の由来や作製・修理の年代について、資料が発見できず不明な点が残されたままとなった。今後の資料調査の進展によって、新たな事実が解明されることを期待している。

文書資料の調査

初等科本館1階には、学校業務で作成された明治期以来の簿冊類がキャビネット3台に収蔵されており、その概要の把握と保存環境の改善がかねてより課題となっていた。2017年から調査と整理が開始され、キャビネットから簿冊を取り出して作業スペースに並べて汚れを落としたのち、表紙や概要の撮影・仮目録の作成を行って資料番号を付したしおりを挟み（画像2）、資料保存用の中性紙箱に収納して西館



2. 日誌類の整理作業

資料展示室に保管する作業を続けている。2018年度までに整理を施した簿冊・文書は、游泳記録37点（明治40～昭和18年）、遠足記録67点（明治37～平成7年）、運動会記録89点（明治42～平成16年）、日誌・会議録等26点（明治21～大正13年）の合わせて219点であり、まだキャビネットに残されている文書全体の4割にも達していないと思われる。また、本館地下倉庫に残された文書資料についても、不要なものと保存すべきものとを仕分ける評価選別を施したうえ、整理と目録作成を行った。そのなかには1939（昭和14）年の本館建設工事現場を撮影した写真帳や、戦後の入試・施設関連簿冊など歴史的に貴重な資料が含まれていた。

仮目録作成の段階では各簿冊の内容を精査するに至らないが、游泳・遠足・運動会は明治から現在に続く重要行事であり、初等科で行われてきた教育を知るうえで一級の歴史資料であることはいうまでもない。たとえば「游泳記録」（明治40年）には当時の乃木希典院長による講話「吉田松陰先生」の筆記録が綴じられ、翌年の「游泳記録」に添付された「学習院游泳記念絵はがき」は、本紙12号の表紙でも紹介した。運動会の記録には各年の競技プログラム・競技成績の記録・版画による競技イラスト（画像3）・生徒により記された記録などが綴じられており、1939年のプログラム「運動会次第」には、「手

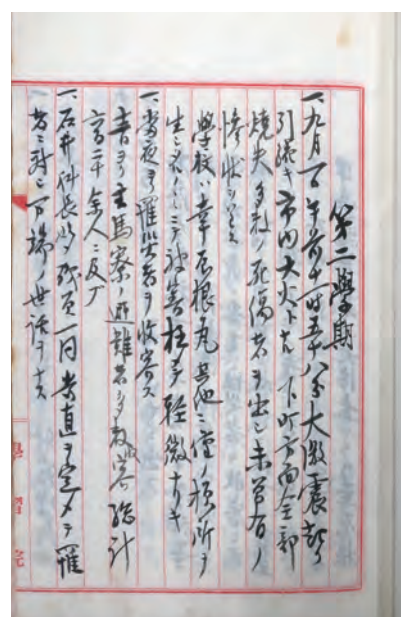


3. 「秋季大運動会記録」（明治42年10月31日）

榴弾投」「武装」「突撃」といった戦時色を反映した競技名が掲載されている。遠足記録には、その年々に各学年がどこに出かけていたかが記されており、時代ごとの変化や傾向が分析できるとと思われる。

会議録・日誌については、最古のもので1888（明治21）年の会議記録が確認され、学習院上野分校が設置されていた時期（明治23年～32年）の同校会

議録や、昭和戦時期の疎開日誌も残されていた。たとえば「日誌 明治三十五年二月」には、3月22日に「明日ヨリベースボールヲ行ハス 四年ハ雨覆体操場ノ北、便所ノ前 五年ハ大銀杏樹ノ東 六年ハ雨中体操場ノ西、運動場ノ東部」との記載があり、初等科の授業で野球が行われていたことが示されている。「大正十二年四月以降 日誌 教務掛」（画像4）には、同年九月一日に発生した関東大震災が、「午前十一時五十八分大激震起リ引続キ市内大火トナル下町方面全部焼失多数ノ死傷者ヲ出シ未曾有ノ惨状ヲ呈ス」と記されていた。「学校ハ幸屋根瓦其他二僅ノ損所ヲ生シタルノミニテ被害極メテ軽微」だったため「当夜ヨリ罹災者ヲ収容」し、教職員が直直を定め9月末まで罹災者約700名の世話をを行ったという。初等科が授業を再開したのは10月15日であった。会議録や日誌の解説によって、初等科における学校生活の様子や社会との関わりなどが、明らかにされていくであろう。



4. 「大正十二年四月以降 日誌」

今後の課題

今回紹介した初等科の資料群は、学習院の歴史資料としてはもちろん、近現代日本の初等教育の歴史資料として高い価値をもつ。また歴史と伝統の確認や年史編纂のみならず、初等科の授業をはじめさまざまな教育研究に活用される可能性をもっている。すみやかな整理と保存、調査研究およびデジタル化がのぞまれるが、調査・整理作業の時間および作業人員・作業スペースの確保、整理済み資料の保管スペースの確保が当面の課題となっており、資料の保存環境も整備する必要がある。今後も初等科と協力しながら、資料の活用によって豊かな実りを実現できるように努めていきたい。

主な活動（2019年2月～2019年6月）

◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新
- ②各部署で保存期間満了となった文書ファイルの評価選別（財務部財務課・大学経理部大学経理課、大学理学部事務室、大学国際センター、大学アドミッションセンター、大学学生センター教務課、業務戦略渉外部業務戦略渉外課）
- ③学習院マネジメントスクール（2019年3月廃止）文書ファイルの評価選別、整理
- ④「文書ファイル整理・管理の手引き」の一部改訂（2月）

◆文書・資料の調査・整理及び目録作成

- ①アーカイブズ所蔵史資料・刊行物の再整理・目録修正
- ②大学図書館移管資料（戦前期公文書ほか）の整理
- ③広報課移管写真・フィルム・音声テープほかの選別・整理
- ④美術部「泰西名画展」（昭和24年）関連資料の調査および聞き取り
- ⑤自動演奏ピアノの維持管理

◆史資料の受贈・移管等

- ①旧医務室看板等（大学史料館より移管）



旧医務室（旧中等科道場）
平成10年取り壊し前の建物の様子

医務室看板

- ②『学習院一覽』（昭和5年、10年、18年 大学図書館より移管）
- ③学習院卒業学生製作 S P 盤レコード（昭和5年 大学図書館より移管）

◆教育支援・広報支援等

- ①女子部「高Ⅲ自由講座」での秩父宮ラグビー場（女子学習院跡）見学（2月18日）

- ②新任教職員辞令交付式講演「学習院の歴史—史資料からみる学習院の教育・キャンパス・学生—」（4月1日）
- ③大学文学部教育学科「学校アーカイブズ論」での授業担当および所蔵資料紹介（5月8日）



- ④幼稚園父母講座講演「史料や写真でみる学習院幼稚園の歴史」（5月24日）
- ⑤経済学部入門演習「学習院の歴史」講義（6月6日）

◆その他

- ①東海大学学園史資料センター見学（4月）
- ②全国大学史資料協議会東日本部会への参加、帝国データバンク史料館（3月）、東京経済大学（5月）

◇目白キャンパス内建造物について

【東別館：国登録有形文化財】 大正2（1913）年竣工

東別館の耐震・修復工事が終了し、今年4月より大学史料館・学芸員課程事務室として使用されています。



学習院アーカイブズ・ニュースレター第14号
2019（令和元）年7月15日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ
Gakushuin Archives

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-5992-1285（直通）
事務室 西5号館（本部棟）地下1階
<https://www.gakushuin.ac.jp/ad/archives/>